

## 韓国の漢字教育

——ハングル専用からインターネットの普及まで——

呉 美 善

### 1. はじめに

韓国では日本と同様漢字文化圏に属している故、韓国人の日本語学習者は当然漢字・漢字語に関する基礎知識は持っているはずだということで、取り立てて漢字教育が行われていない場合が多いようである。韓国における漢字使用・漢字教育の実態をみると、総語彙の70%ぐらいが漢字語であるし、中学校・高等学校で学習する1800字の基礎漢字には日本の常用漢字82.6%が含まれており、非漢字圏の学習者より確かに有利であると言える。ところが、漢字文化圏といわれても、日頃の言語生活における漢字の使用は「ハングル専用」や「インターネットの普及」などの影響でごく一部の範囲に限られており、実際の社会で漢字と接する機会も減っていく一方で、日本語学習者の漢字能力はさほど高くない。本稿は、韓国における漢字教育・漢字使用の実態をまとめ、韓国人学習者のための漢字の学習法・指導法の改善に資することを期したものである。

### 2. 韓国語の文字—漢字とハングル

韓国で現在使用されている文字は漢字・ハングルが主なものであり、このほかにローマ字も使われる。さらに、数学など特別な場合にはギリシア文字なども用いられる。このうち、漢字は本来中国で中国語を書き表すために発明された表意文字であり、ハングルは韓国で発明された表音文字（音節をさらに子音と母音の要素に分解できる単音文字）である。

韓国に漢字が伝来したのは中国の漢（紀元前202年—西暦220年）の時代と推定されている。4、5世紀頃には一部の貴族層に限られ漢文を用いての文学活動が見え、中国の古典が教育機関の教材に採択されるようになる。それ以来漢字・漢文の普及は進み、知識人の主な正規の書記的伝達手段は20世紀の初頭まで漢字漢文（古典中国語）であった。このことは1443年初めて韓国語を表記するための文字体系ハングルが創製されてからも変わらない。ハングルによる日常の文字生活は正規の手段としての漢字・漢文の「文」に対して「諺文」と卑称され、使用階級は下級の官吏や婦女子に限られた。ハングル創製以後残されたハングル文献は漢文理解を目的とした経書や仏典などを注釈・翻訳した「諺解」類、農学・医学・翻訳学などの実用書の翻訳、初級漢字教科書、道德啓蒙書などが主なもので、独自の韓国語による文学作品は17世紀以後となる。つまり、日常の文字生活におけるハングルの普及は知識層である両班ではなく実用的業務に携わる下級官吏や婦女子の使用に限られたということである。実用書は下級官吏を、文学作品は主に女性を対象として作られたという歴史的なことからは、ハングルは常に公的な漢字・漢文とは違って私的なものであり、漢字・漢文の方が重要度の高いものであるという文字生活の様相がうかがえる。両班層は漢字使用により身分的な優越感を誇示し、国家もハングルは国民を教化させる手段と考えた面が強く、ハングルだけによる言語生活を強要しなかったと見える。従って、主に知識層による記録文化の大部分は漢字・漢文で書かれた。ハングルがようやく公的な地位をえるようになったのは第二次世界大戦後のことである。

正規の伝達手段は漢字・漢文ではあったが、ハングル創製以後の韓国における文字生活は基本的に漢字を用いて漢字語を表記しない主義によって貫かれているようで、歴史的にも現在においてもハングル文の漢字使用は少ない。支那昭平（『朝鮮語における漢字語の位置、『日本語学』6-2、明治書院、1987、2.）によると、「ハングル中心主義は文字創製直後にもあり、ことに実用書において15世紀末葉からすでに実行されるが、17世紀以

後の女性を主な対象とする小説類、また女性の手になる書簡・日記にはまったくと言ってよい程漢字の使用はない。このような小説類等における文字使用の伝統は開化期以後の現在に至るまでよく保たれているように見える」という。実際、韓国では第二次世界大戦後からハングル専用論と漢字混用論の間を言語政策が揺れ続き現在に至るが、1970年代のハングル専用政策の影響で日常の言語生活から漢字の姿が徐々に減ってきた。街頭の看板と標識もハングルになったし、ハングル専用の新聞も出てきた。新聞と雑誌の大部分は漢字の使用を最大限抑制している。そればかりではなく公的な文書や専門的な學術書からも漢字は珍しくなっている。その分ハングル世代と呼ばれる若い世代では高等教育を受けたものでさえ、その漢字能力はさほど高くない。

漢字を制限ないし全廃へ持っていくには日本より韓国の方が、ある意味では条件がそろっている。単音節の漢字が韓国語では一字で表されるし、漢字の訓読がないことである。ハングル創製以前、古代において訓読借字法が試みられたことはあるが、組織化しなかった。つまり、固有語を漢字の意味を借りて表記しない。また、音読にしても漢字語によっては2、3通りのものもあるが、大半は1種類しかない。従って、すべての漢字で書かれ得る語は現在韓国漢字音で読めるのであり、漢韓字典の方まで韓国漢字音が広まっている。例えば、『漢韓大字典』（1966、民衆書林）等、付録に韓国語音で漢字が引ける部分が入っているものもあるし、最近の日本語学習用の「逆順兼用日本語漢字読み辞典」（1995、進明出版社）「エッセンス日本語読み辞典」（1999、民衆書林）等、本格的に韓国漢字音で引く日本語漢字読み辞典まで出ている等、ハングルによる表記は固有語ばかりではなく漢字語の領域でも可能ともいえる。

問題は意味面にあると思われる。ハングル学会編『jungsajeon（中辞典）』には総91,825語の語彙があげられている。南廣祐（「ハングルと国語」、大学教養国語、仁荷大、1983）の分析によると、このうち同音異義語は30,180語であり、総語彙の32.9%に当たるといふ。その比率は次の通りである。

<表1> 『jungsajeon』の同音異義語

	固有語	漢字語	混成語	計
語 彙 数	3,120	22,983	4,077	30,180
同音語内比率	10.3%	76.2%	13.5%	100%
総語彙内比率	3.4%	25.1%	4.4%	32.9%

この表によると、同音語が約30%あり、そのうち漢字語は約25%のもっとも高い比率になっている。これは、音の長短や中国語のように四声を考慮しない韓国漢字音の特色による結果である。金文昌（「ハングル専用論と韓漢混用論の比較研究」、『国語教育と漢字問題』、韓国精神文化研究院、1979）の統計によると、韓国で刊行されている漢字辞典には普通552個音に41,388字が配当されているという。1音当平均75字が所属している数値である。それに、1音1字の43音を除くと、残り509個の音は平均81.3字を表示しなければならない。つまり、ハングル1字が平均81個の同音異義語になるわけである。漢字混用論者は、視覚上同音語を区別するためには漢字語は漢字で書くべきであると主張しているが、同音漢字語の比率の面だけからは妥当に見える。

### 3. 韓国語の語彙体系と漢字語

一般に韓国語の総語彙の70%が漢字語であるといわれているが、国語辞書の見出し語の語彙分析による類別構成比は次の通りである。

まず、1957年刊行のハングル学会の『keunsajeon（大辞典）』の例である。

&lt;表2&gt; 『keunsajeon』 語彙類別構成比

	固有語	漢字語	外来語	計
標準語	56,115	81,362	2,987	140,464
方言	13,006			13,006
固有名詞	39	4,165	999	5,203
古語	3,013			3,013
吏読	1,449			
連語	990			
計	74,612	85,527	3,986	164,125
%	45.46%	52.11%	2.43%	100%

<表2>は韓国語での固有語と漢字語の構成比の基準として用いられてきたものであるが、一般的に漢字語の割合が70%であるといわれているのとは違って、漢字語は52%ぐらいを占めている。

次は1961年刊行の李熙昇の『gugeodaesajeon (国語大辞典)』の分析である。

&lt;表3&gt; 『gugeodaesajeon』 語彙類別構成比 (一)

	① 固有語	② 漢字語	③ 外来語	④ 固 + 漢	⑤ 固 + 外	⑥ 漢 + 外	⑦ その他	計
語数	34,272	142,876	13,847	12,072	147	4,047	17,942	225,203
%	15.22%	63.44%	6.15%	5.36%	0.07%	1.79%	7.97%	100%

<表3>では⑦に方言、俗語、吏読などを入れ<表2>の分類とは違う基準になっている。なお、④⑤⑥には二つの構成要素が混じっている。それぞれを<表2>のような分類基準に変えると、<表4>になる。

&lt;表4&gt; 『gugeodaesajeon』 語彙類別構成比 (二)

類別	固有語	漢字語	外来語	計
語数	58,323.5	150,935.5	15,944	225,203
%	25.9%	67.02%	7.08%	100%

<表2>と<表4>を比較すると、<表4>の方の語彙数が61,078語多いが、その大部分は漢字語で65,000語増え、外来語も12,000語増えている。これは学術語や専門用語を含めたからである。<表4>でも漢字語の構成比は70%ではなく、67%である。李應百 (『国語辞典語彙の類別構成比から見た漢字語の重要度と教育問題』、『語文研究』25・26、韓国語文教育研究会、1980) は辞書の見出し語にあげられている名詞の中には「-hi」「-hada」が接続され、副詞や動詞、形容詞に派生するものが少なくないが、これらの派生形は日常語としての使用率が非常に高いものであり、見出し語として数えるべきであるという。動詞の場合は、「-hi」など派生したものをそれぞれ別の見出し語としてあげているので名詞も同じく取り扱おうと<表5>になる。つまり、漢字語70%という数字は<表4>に見出し語として扱われていない「-hi」「-hada」系の派生語までを加えたものであり、固有語の2.8倍になる。

&lt;表5&gt; 『gugeodaesajeon』 語彙類別構成比 (三)

類別	固有語	漢字語	外来語	計
見出し語数	58,323.5	150,935.5	15,944	225,203
hi・hada系派生語	4,589	27,810	252	32,651

計	62,912.5	178,745.5	16,196	257,854
%	24.4%	69.32%	6.28%	100%

#### 4. 日常語の語彙状況

辞書の見出し語からは漢字語の構成比70%という結果が出たが、日常語における語彙状況ではまた違う分析結果が見られる。

次は南宮建（「韓国語単語の発生頻度分布と Entropy に関する研究」、ソウル大修士論文、1979）による1978年度の日刊新聞と1975年以後の小説・教養誌などから任意抽出法により取り出した33,000語の使用頻度及び確率の分析である。

100語の最多使用語彙のうち漢字語は純漢字語16語（16%）で、韓漢混用語 3 語を含めると19語（19%）になる。

<表 6> 上位100位内の漢字語

純漢字語	自己（順位23） 問題（35） 只今（41） 始作（48） 等（50） 時間（54） 韓国（55） 事実（59） 女子（59） 人間（59） 當身（69） 番（70） 関係（77） 日（77） 先生（86） 生活（90）
韓漢混用語	geo 女（26） 為 hada（30） 対 hada（33）

<表 7> 構成比（異なり語数）

固有語数	漢字語数	計
3,579	4,653	8,232
44.69%	55.31%	100%

日常語における漢字語の比率は国語辞典の70%より少ない55.3%であり、使用頻度上位100語にも19語しか入っていない。しかし、いずれにせよ日常語においても総語彙の過半数を漢字語が占めている状況は把握できる。

次は、日常語における漢字語の表記であるが、日本と違って漢字語を表記する時は漢字ではなく、ハングルを使うことが増えている。韓国での漢字語の表記法には3種類ある。まず、漢字表記、ハングル表記、第三に、ハングルと漢字の二重表記である。二重表記の場合は、ハングルを（ ）に入れる方法と、漢字を（ ）に入れる方法があるが、教科書をはじめとするほとんどの書物は後者の方法がとられている。

<表 8> 新聞社説における漢字語の比率と漢字表記率

年 代	1920	1945	1960	1970	1990
漢語の比率(%)	68.2	73.3	58.5	53.7	58.3
漢字の表記率(%)	99.5	99.8	90.3	80.1	7.8

上の表は喜喜徹（「漢字系学習者のための漢字教育のあり方」、『世界の日本語教育』4、国際交流基金日本語教育センター、1994）の『朝鮮日報』の社説における漢字語とその表記の調査で、漢字語の比率にはそれほどの変動が見られないが、表記の方では1990年代が7.8%と著しく減っており、最近のハングルでの表記増加の様相がうかがわれる。

1951年から1981年までの新聞記事におけるハングル・漢字・外来語の使用頻度を政治・経済・社会など各分野別に調べた高麗大学校の新聞放送研究所の資料でも比較的漢字の使用率の高い政治・経済面におけるハングルの使用は85%であり、ハングル専用国民実践会の報告資料でも1975年度の7大新聞のハングル使用率は79.9%に

なっている。(金文昌、「ハングル専用論と国漢混用論の比較研究」、『国語教育と漢字問題』、韓国精神文化研究院研究論叢85-4、1985)

つまり、新聞の場合は漢字語の表記に漢字とハングルを交えて使っているが、近年、漢字での表記は減少する一方であり、使用範囲も地名・人名あるいは政府機関名・政党などの固有名詞あるいは同音異義語や強調したい語に限られる傾向が見える。

新聞以外の印刷媒体でのハングル化はもっと進んでおり、朴準篁（『韓日両国書物のハングル化・仮名化比較調査』、『sae（新）国語教育』22・23、1975）による韓・日両国で同時に刊行された小説などの教養書籍20種の分析では、韓国の方のハングル化は97%、日本の方の仮名化は34.7%（訓読までを仮名化に入れると64.6%）の結果が出ており、韓国の場合大部分の教養書籍がハングルで表記されているのがわかる。

印刷媒体での漢字使用は学校教育における漢字の使用状況とも連動しているもので、特に若者向けの新聞・雑誌での漢字使用はきわめて低い。

## 5. 漢字教育の政策

第二次大戦後、個人や社会団体、学術団体などがハングル専用論と漢字混用論とを議論している間、政府の政策は次のように変わってきた。

1945年：小学校の全教科書を全面ハングルで発行

1948年：ハングル専用法公布

1949年：漢字併用許容

1950年：漢字混用決定

1951年：教育漢字1000字制定

1954年：ハングル専用強調 常用漢字1300字制定 小学校高学年漢字混用

1955年：文教部ハングル専用法発表

1957年：教育漢字300字追加

1959年：文教部、内務部の協調で街頭の看板から漢字追放

1968年：大統領ハングル専用宣言 教育漢字廃止

1970年：小・中・高校の教科書ハングル専用表記

1971年：漢文を中・高校の必須科目に指定

1972年：漢文教育用基礎漢字1800字制定（中・高校各800字ずつ学習） 漢文を独立教科として運営

1973年：各大学に漢文教育科新設

1975年：中・高校の教科書に基礎漢字範囲内の漢字を（ ）内に併記 中・高校の漢文選択科目に縮小

1995年：小学校3・4・5・6年生を対象に基礎漢字600字を学校の裁量で教育可能となる。しかし、600字は制定されていない。

1998年：政府の公用文書漢字併用可能 道路標識、案内文などの漢字併用方針発表

2000年：住民登録証の姓名に漢字併用

となっており、政府の文字政策がいかに無原則であったかがわかる。しかし、政府の政策が拘束力のないものであったために一般の人々は必要に応じてハングルを専用したり、漢字を混用したりしてきた。ハングル専用法の公布以後も漢字を混用する人々に法律的な制裁があったわけではないからである。

政府の無原則的な文字政策による問題は学校教育に現れる。政策が変わるたびごとに、教科書から漢字が現れたり消えたりしたのである。特に、1970年の全面的なハングル専用は一大混乱をもたらした。政府はハングル専用による副作用を補完するために1971年漢文を中・高校の独立必須科目に指定した。漢文を独立必須教科と新設した根拠としては「伝統文化を土台に新しい民族文化を創造するがために漢文解読の必要性があるのであり、漢文学習を通じて古典文化の継承と漢字文化圏の調和を目的とする」ことがあげられた。つまり、漢文教育の目標

は「伝統文化の継承」のための「漢文解読能力の伸張」が主なものであり、韓国語をハングルと漢字で混用して表記するための漢字知識が目標ではない。その目標通り、現在使われている高校の漢文教科書は（『高等学校漢文Ⅰ』、中央教育振興研究所、1996）最初の漢字語の基本構造を学習する1、2単元には、「地球・人類・大韓民国・体育・健康人・科学立国・祖国統一・国難克服…」等、現在日常語として使われている例があげられているが、3単元以降終わりの14単元まですべて古典学習のみになっている。

1972年から漢文は独立教科として運営されるようになり、1973年からは各大学に漢文教育科が新設され漢文教師を養成することとなった。それ以降何回かの教育課程の改編を経て、漢文教科は選択科目に縮小されて現在に至る。中学校及び人文系高校では週一時間の漢文教育がなされるが、実業系の高校では漢文教科がない。1972年の8月には漢文教育用の基礎漢字1800字が制定され、中・高校でそれぞれ900字ずつ漢文科教育を通じて必須的に指導することとなった。しかし、全教科書からの漢字の削除は問題点が多く指摘され、1975年からは中・高校の教科書に基礎漢字範囲内で漢字を併記することになる。現在使用されている教科書のうち漢字が使われているのは、中学校では国語と漢文、高校では国語（文法・作文・文学を含む）と漢文、社会（倫理・地理を含む）、歴史の教科書となっている。また、国語・漢文以外の教科書では漢字の表記は「ハングル（漢字）」のような形で併記され、漢字の表記はごく一部に限られる。

なお、韓国での中等教育は大学入試制度に影響される傾向が強いが、一時期は漢字・漢文が出題され中等教育と連携されたものの、現行修学能力試験には漢字・漢文が出題されることがないので漢字学習を回避する現状をもたらした。

以上のように、中等教育では漢文教科を中心とした基礎漢字教育がなされているが、初等教育では1970年以降教科書から漢字が消えたまま現在に至る。初等教育での漢字教育の必要性の議論が引き続き、1995年からは学校の裁量により3年生から基礎漢字600字を教育することが可能になった。しかし、まだ600字は制定されていないので基礎漢字1800字から恣意的に選択して教育している状況である。

基礎漢字1800字は28年前の1972年に制定されたもので、今はほとんど使われていない漢字が79字含まれているし、またよく使われている216字は含まれていない等、現実とは離れたところが多く、現在一部交替や拡大などが審議中であり、2001年8月公式発表の予定である。なお、小学校での漢字教育拡大も提案されている状態である。実際に、尹義淳（『韓・中・日漢字教育の比較研究』、『語文研究』33,1982）によれば、初等学校全学年全科目の教科書に用いられている語彙は延べ116,051語で、そのうち漢字語は異なり7,757語、その漢字語に必要な漢字は2,052字であるという。この統計によれば、初等学生が教科書の語彙を明確に理解するためには2,000字ぐらいの漢字を学習した方が望ましい。ちなみに、漢文教師を中心としたアンケートでは初等学校での漢字教育拡大に賛成が80.1%、1800字の基礎漢字の不足が51.6%という結果が出た。

## 6. インターネットの普及

最近、韓国では爆発的なスピードでインターネットが普及しつつある。10軒に4軒の割合でインターネットがネットワークされているし、そのうち2～3軒は超高速システムでつながっている。また、全国的に「PC房」という店が広まり、使用料を払えば24時間インターネットが利用できる。インターネット専門調査機関ニルソン・ネットレイティングスが今年の3月一ヶ月間世界21のインターネット先進国を対象に調査した資料（東亜日報2001.5.6.）によると、韓国は個人別月平均利用時間が16時間51分（一位）で圧倒的に長い。訪問サイト数も二位のアメリカの2.7倍になる。利用時間帯もアメリカとヨーロッパは夜10時をすぎると利用率が急激に下がるが、韓国では午前2時から下がる。その反面、一つのページにとまる時間は一番短く、平均28秒である。アメリカは平均54秒で、残りの19カ国の平均は42秒である。もう一つ、韓国のインターネット利用の特色は利用層の不均衡にある。20歳未満と50歳以上の二つの集団に分けて調査した結果、韓国は41.6%と5.1%になり、二つの集団の差は36.5%もある。アメリカは25.2%と21.9%、日本は18.4%と11.5%であり、スウェーデン・デンマーク・ドイツは50歳以上が2～5%多く、イギリス・フランス・イタリアなどは20歳未満が少し多い水準であるという。

つまり、韓国ではインターネット利用の拡大は20歳未満の世代による傾向が強く、またこの世代の利用は情報の習得よりはゲームや娯楽に傾く面が多い。専門家たちが最近の韓国でのインターネット拡大を否定的に見るゆえんであろう。なお、彼らがインターネットで用いる言語の様相は社会的な問題になりつつある。検索語及びE-mail、その他ほとんどがハングル専用になっており、そのハングル専用も原型がわからないぐらいの形の変化が見られる。インターネット言語の形の変化は速いスピードを主な目的とするものであり、一番目につく形はイモティコン（エモーション+アイコン）、つづり方を無視し発音通りに書く方法やいくつかの字を無原則に縮約する方法等があるが、いずれも一分間500字が打てる学生が多いというコンピュータ通信上の速いスピードと共通する。このように速いスピードが要求される背景に韓国音で打った漢字語まで漢字に変換できる時間等はなく、もっぱらコンピュータ言語はハングル専用になるのである。その分、若い世代の漢字回避の傾向は深まっていく一方である。

## 7. 日本語の漢字学習との関係

以上ハングル専用からインターネットの普及まで、韓国語における漢字をめぐる文字使用の実態をまとめてみたが、以下ではそれらと日本語学習の関係をまとめてみよう。

まず、『日韓辞典』に収録されている日本語の漢字語（34,015語）を調べた結果（兪長玉、「日韓両国語の漢語の対照研究」、『語文学研究』7、暁星女子大学校外国語大学研究所、1994）、77.85%（26,161語）が韓国語と同形であるという。同形のもののうち、両語の意味領域がほとんど一致するものは98.79%（26,161語）になり、日本語の漢字語の80%近くが韓国語と同形で意味領域が一致することとなる。

次に、韓国の基礎漢字1800字は日本の常用漢字1945字と数を単純比較すると145字少ない。このほかにもずれがあり、基礎漢字に入っていない常用漢字は339字、常用漢字に入っていない基礎漢字は194字になる。常用漢字と基礎漢字に共通する漢字は1606字で常用漢字の82.6%の漢字が基礎漢字に含まれている（曹喜徹、「漢字系学習者のための漢字教育のあり方」、『世界の日本語教育』4、国際交流基金日本語教育センター、1994）。こういう字種の違いが見られる理由は、常用漢字は一般の社会生活における漢字使用を目安としたものであるが、基礎漢字は漢文教育において学習すべき漢字であるからである。つまり、基礎漢字には日常生活における漢字使用の実態が反映されておらず、「率、圏、綱、艦、剂、偏……」など、使用頻度の高い字の漏れが見られるが、これらの字はいずれも常用漢字には含まれている。反対に、「也、之、而……」など、基礎漢字にはあるが常用漢字には含まれていない漢字には助字類が多く、一部の字を除いては日本での使用がきわめて低いものである。

したがって、字種だけに限って言えば、韓国人の日本語学習者は基礎漢字をもととして比較的容易に日本語の漢字が学習しうるといえる。しかし、問題は基礎漢字の字種ではなく、その字種が実際どのように漢字語して漢字教育で持ち出されているかと言うことであろう。現代韓国語における基本的な漢字語を固有名詞・普通名詞・用言を問わず漢字で併記している代表的なものとされる高校の国語の教科書（教育部「高等学校国語上・下」1994）には異なり語数2450語の漢字語が主にかっこの中に併記されている。これらの漢字語を日本語学習の初中級で扱われる漢字語として選ばれている文化庁『中国語に対応する漢語』との重なりを調べた小石淑夫（『韓国の漢字教育と日本語学習—高等学校国語教科書を中心に—」、大邱暁星 katorik 大学校研究論文53集、1996. 8.）の調査によれば、469語の漢字語が重なったという。この数字は、高校国語教科書の漢字語の約19%であり、『中国語に対応する漢語』の約25%に当たるものである。すなわち、韓国の高校国語教科書には日本語学習初中級において習得すべき漢字語（音読みに限る）の四分の一がかっこの中に併記される形で用いられているのであり、字種に比べるとその重なりは著しく少ない。それに、字音（呉音、漢音、宋音など）・字訓などの異同も見られ、ほとんどの場合一音一訓を基にしている韓国語の漢字と多音多訓の日本語漢字の隔たりは大きい。さらに、字体（旧字体、新字体など）の異同もある。

以上のような状況は、韓国語を母語とする日本語学習者の漢字能力に対する徹底した調査・研究なしでは効果的な日本語学習と指導はし難いと言うことを示唆するものであろう。

## 8. まとめ

韓国における文字生活はハングル創製以後を中心に考えると、基本的には漢字を用いて漢字語を表記しないハングル専用主義によって貫かれているようで、歴史的にも現在においても日常の言語生活における漢字の姿は少ない。今までの状況から漢字縮小の傾向はこれからもなお進んでいくだろうと予測できる。なお、最近のインターネット普及の拡大を牛耳る若い世代の場合、ハングル専用の傾向と漢字回避はより強く、激しいスピードで深まる一方で、高等教育を受けたものさえ漢字能力はさほどお高くないわけである。

学校教育における漢字教育は中等教育での基礎漢字1800字が中心となっているが、基礎漢字は「伝統文化の継承のための漢文解読能力の伸張」が目的であり、韓国語をハングルと漢字で混用して表記するためのものでないので、字種及びその使用に日常語との隔たりが見られる。

以上のような漢字背景を持つ韓国語を母語とする日本語学習者に対する漢字教育は今までのような「初級段階では漢字教育なし」「中級段階以降は単語学習の一部として取り扱う」という教授法では問題があると思われる。字種の面だけから見れば、基礎漢字と日本の常用漢字との重なり、また基礎漢字と日本の学習漢字との重なりなど、確かに非漢字圏の学習者より有利である。しかし、韓国語漢字は一音一訓が基本であり、まして訓読みはしない。韓国ではすべての漢字で書かれ得る語は韓国韓字音で読める。わからない漢字に出会った場合、漢字の部首や字画など字典を引く方法をわきまえていなくても、韓国音で一応解決できる状態である。したがって、韓国語漢字の一音一訓を基にして、日本語漢字の多音多訓を受け入れるような指導法が必要とされる。なお、漢字学習の応用力を拡大させるためには字典の引き方に関する知識の伝達も必要であろう。

### 呉 美善 (Oh, Misun)

1955年生。韓国外国語大学日本語科卒。お茶の水女子大学大学院修士・博士課程修了（博士号取得）。日本語学専攻。韓国の慶熙大学教授。著書に『日本文化の理解』（BOGOSA, 1999）『日本語の理解』（BOGOSA, 2000）訳書に『日本語文法入門』（DARAKWON, 1992）、論文に「日本語動詞の文法化に関する考察」（お茶の水女子大博士論文、1997）など。